

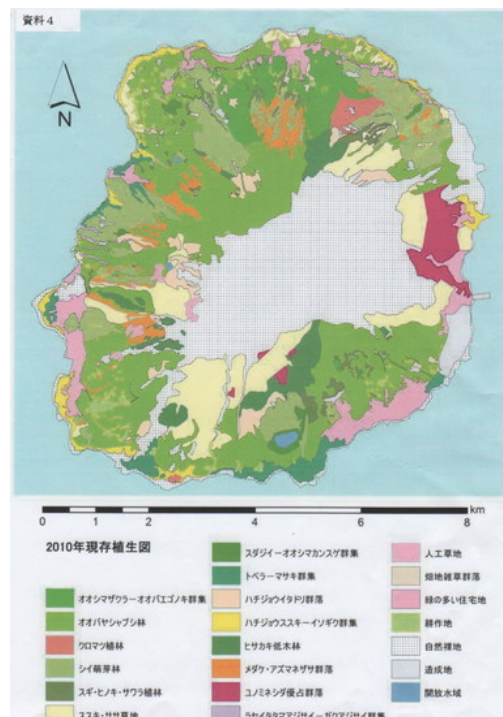
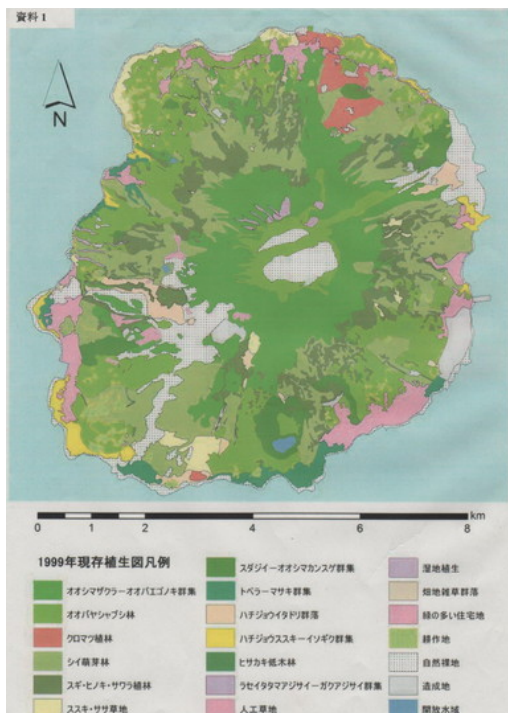
つくばフォレストクラブ三宅島自然研修の旅

2015年11月13日～15日

東京・竹芝桟橋を出港した「さるびあ丸」は、翌朝5時には三宅島に接岸しました。島はまだ暗い。7人の仲間は皆睡眠不足です。とりあえず7時の朝食まで民宿スナッパーで仮眠をとることになりました。

三宅島は度々噴火災害に見舞われ、この百年でも1940年（昭和15年）、1962年（昭和37年）、1983年（昭和58年）、2000年（平成12年）と4回も記録し今でも火山活動は継続しています。

2000年の噴火前には3,800人の人口がありましたが、現在では約2,700人、住宅地の避難命令は全て解除されましたが今でも火山ガスは流れ続けています。



今回の旅の目的は（1）噴火後の植物遷移の姿を観察、（2）筑波大学が進める環境保全型緑化工法を見学することです。

9時、出発。空は雨模様、暴風・水害注意報が出ていました。3台のレンタカーに分乗し1号車には筑波大学関係者4人（田村先生、ユタ大学ベッテンガー教授、スリランカの大学院生モーリンさん、中国の秦さん）、2号車には3人（福木哲朗、塚本紘、小林光子）、3号車には4人（富田研二、佐藤



幸輝、遠藤純子、塚本栄子)、総勢11人が2日間の行動を共にすることになりました。

まず初めに訪れた場所が1983年の噴火でできた薄木地区の溶岩流。90か所以上の火口からマグマが噴出し、溶岩流は海岸にまで達した典型的な山腹割れ目火山のスポットです。噴火から20年以上が経ち、溶岩流の上にはクロマツ、オオバヤシャブシ、ハチジ



ョウススキ、ハチジョウイタドリ等の再生した姿がありました。

オオバヤシャブシは溶岩上などに真っ先に侵入する樹木です。根で窒素固定するため、裸地の上でも育ちます。火山ガスに強いユノミネシダはガスが減るにつれハチジョウススキへと遷移していく姿が見てとれます。溶岩流に植物が生育できるB層になるまでには1000年位はかかると田村先生から説明がありました。



そのすぐ近くに新霽池跡がありました。新霽池はかつて亀やワカサギ等が生息し、湖面は1日に七色に変化すると言われた神秘の湖でした。1983年(昭和58年)、マグマ水蒸気爆発によって湖は一瞬にして消えてしまいました。水蒸気爆発とは、マグマが地下水や海水等と接触することにより急激に大量の水蒸気が発生して爆発的な噴火を起こす現象で

す。湖は完全に干上がり雨水も溜まりません。かつての面影は湖を囲んでいた断崖に見ることが出来ました。



ここから3キロ離れた場所には、火山湖・大路池があり水を満々と湛えていました。2500年も昔に火山で出来た湖で、周囲にはスダジイ、タブノキ、ヤブツバキ等からなる貴重な照葉樹林に覆われた原生林が広がっていました。大路池ではカモやバンの仲間が見られました。三宅島はバ

ードアイランドと呼ばれ探鳥の島としても有名です。中でもアカコッコは島を代表する鳥で国の天然記念物に指定されていますが絶滅危惧種でもあります。入口に「アカコッコ館」があり資料が展示されていました。我々は自然保護活動の一助にとアカコッコのバッジを購入しました。

三宅島では植物の名前に‘オオ’、つまり大きい葉という意味の形容詞が付く植物が目につきました。オオバヤシャブシ、オオバエゴノキ、オオムラサキシキブ、オオツルコウジ、オオシマカンズゲ……。これは進化の過程で葉が大きくなったものだそうです。湖の側



に「迷子椎」と呼ばれるはスダジイの大木がありました。樹齢は750年とも言われています。溶岩や火山灰にも負けることなく樹木は年月をかけて育ってきました。

三宅島は、活動火山で出来た溶岩流や裸地と原生林が隣り合わせに共生する不思議で逞しい島です。

島の北東、海岸沿いに三七山があります。ここもジオスポ



ットで1962年（昭和37年）の噴火で誕生したスコリア丘です。現場には丁寧に解説文が掲示されていました。スコリアとは、マグマが噴出し吹き上げられて飛散冷却してできる岩塊で、多孔質で黒っぽい形をしています。白い軽石より重さを感じました。

車で海岸線を更に北に向かうとシイの木が立ち枯れ乱立した山が目に入ります。火山ガスの影響で枯れた木々です。火山ガスには二酸化硫黄や硫化水素等が含まれています。下草



は一面ハチジョウススキに覆われていました。

火山噴火後の植生の回復過程には火山ガスの影響と火山灰の影響、この二つが大きな要因となるそうです。島を回ると

と至る所に枯れた木々が立ち並ぶ姿をめにしますが、これは火山ガスが風に乗って山肌を舐めつくした痕です。

2000年（平成12年）発生の噴火で泥流に埋没した椎取神社の姿は生々しく強烈でした。高さ3mもあった鳥居は頭を少しだけ残し、社殿は半分以上が埋まっていました。泥流の恐怖を感じます。噴火以前の境内はスダジイ、タブを主とした照葉樹林に覆われた美しい鎮守の森であったことは当時の写真が証明しています。神社をとり囲む周囲の山々にはやはり火山ガスに襲われ枯れた白い木が目立ちますが、それでも確実にオオバヤシャブシやクロマツ等の幼樹が成長し植生は少しずつ再生していました。



島のジオスポットの一番は、溶岩流のすさまじさと噴火災害を体験できる阿古地区です。



1983年（昭和58年）に発生した噴火では溶岩流が阿古地区を襲い340棟以上の家々を呑み込みました。住民は島の反対側に避難し1人の死傷者もでなかったそうです。中でも迫力は

現在も残る旧阿古小中学校校舎の残骸で、見るも無惨な姿をさらしていました。



竹輪の様な形をした溶岩がありました。掲示板の解説によれば溶岩樹形といい、溶岩の流れが樹木を取り巻いた時、生きた樹木は水分を豊かに含んでいるため熱い溶岩が冷やされ固まったものだそうです。三宅島では火山活動で出来た様々な形態を観察することが出来ます。



横殴りの強い雨が降る中を精力的に観察して回りました。この日の最後は「ふるさとの湯」温泉です。風呂場から眺める海に沈む夕日が売り物ですが生憎の雨、荒れた黒い海が広がっていました。島のグルメと云えば海鮮料理です。期待しながら宿に帰ると料理を作る肝心の奥さんが飛行機の欠航で帰島できず、やむなく全員近くの食堂で夕食を摂ることになりました。刺身を注文すれどもシケのためマグロだけ。それでも参加者全員ワイワイ！ガヤガヤ！島焼酎を飲みながら自然研修会は大いに盛り上がりました。

一夜明け翌日も朝から雨です。道路事情を心配しながら雄山の中腹に設置された田村先生たちの筑波大学・環境保全型緑化工法の現場を見学することになりました。研修のもう一つの目的地です。雄山の山頂火口付近は立ち入り禁止エリアですが、その境界に放置された牧場公園がありました。この日、周囲一帯は霧に覆われていましたが、草原はひび割れがひどく、方々に大きな谷筋を作っていました。ガリーと呼ばれるV字状の地形です。



雨水が集まり集約した水の流れによって地表面が削られて出来たものです。スコリアの上に火山灰が積もると地面は目詰まりし水の浸透性が悪くなり、雨が降ると濁流となって地面を削り取ってしまいます。そのため植物は根づかず植生の回復にとって深刻な問題となりました。

その解決策の一つが環境保全型緑化工法です。クレセントロールを設置して土砂が流れ落ちるのを抑え、植物の根付きを促そうとするものです。まだ実験段階ですが、効果は



現れハチジョウススキの生育などを観察すること

が出来ました。

帰りの船は午後１時４０分の出航です。慌ただしく見学を終え急いで船着き場に行き弁当を開いて昼食です。皮肉にも天気は回復し青空になりました。船中の船酔いはありませんでしたが旅に満足し心地よく酒酔しました。富士山が赤く映える美しい夕景でした。船中を含め二泊三日の旅では多くの収穫がありました。旅の計画から現地の案内までお膳立ての全てを田村先生にお任せし心苦しくも感謝でいっぱいです。細やかな心配りにはただただ頭が下がりました。有難うございました。

尚、この研修会にはつくばフォレストクラブより２万円の活動助成金を頂きました。



参考資料：三宅島の自然ガイド（文一総合出版）

田村先生 配布資料

現地パンフレット

現地ジオスポット解説掲示板

その他

（報告者：富田）